

報道機関 各位

## ～いのちのたび博物館所蔵～ 昆虫化石から新種発見！ 実物化石を特別公開します！

この度、いのちのたび博物館（北九州市立自然史・歴史博物館）が所蔵する山口県美祢市産の化石が、パリ自然史博物館・九州大学・ロシア科学アカデミー・ロンドン自然史博物館・美祢市歴史民俗資料館による共同研究の結果、新種の昆虫（ハチ）であることがわかり、学術誌に掲載されましたので、実物化石を特別公開します。

### 記

#### 1. 発見の要点

- ・膜翅目（ハチ目）ナギナタハバチ科の**新種**
- ・「サマルカンディキア・ハラダイ」と命名
- ・「ハラダイ」は化石の発見者の原田隆好氏（北九州市在住）を称えて名付けられた
- ・論文第一著者の大山望氏は、北九州市出身の若手研究者

#### 2. 発見者の原田隆好氏と論文第一著者の大山望氏による取材対応について

令和7年3月21日（金）10時～12時に発見者の原田氏と論文著者の大山氏が来館され、インタビューが可能です

3. 産地 山口県美祢市

4. 時代 中生代三畳紀後期カーニアン期（約2億3000万年前）

5. 一般展示 期間：令和7年3月21日（金）～令和7年5月11日（日）  
場所：北九州市立いのちのたび博物館 エントランス無料ゾーン  
開館時間：9:00～17:00（入館は16:30まで）

6. 詳細情報 別紙参照

問い合わせ先  
北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）  
〒805-0071 北九州市八幡東区東田2-4-1  
電話：093-681-1011  
担当：自然史課 学芸員 蓑島（みのしま）

## 「いのちのたび博物館所蔵の昆虫化石から新種発見」詳細資料

### 1. 北九州市立自然史・歴史博物館(いのちのたび博物館)に所蔵されている山口県美祢市産の化石(約2億3000万年前)が新種の新種ハチとして記載された

- ・発見された化石は、長さ 5.6 mm、幅 2.7 mm の、ほぼ完全なハチの右前翅である。翅脈(翅に走る筋)の形から、新種であると判断された。
- ・本論文では、いのちのたび博物館所蔵標本の 1 新種のほかに、美祢市歴史民俗資料館所蔵の同じ産地から採集された化石も 1 新属 3 新種が報告された(合計 1 新属 4 新種)。(美祢市歴史民俗資料館所蔵標本の詳細については 3 月 16 日に美祢市より発表されている。)
- ・新種を報告する論文はアメリカ昆虫学会が発行するオンラインジャーナル「Insect Systematics and Diversity」9巻1号に掲載された。著者は、大山望(パリ自然史博物館・九州大学)、前田晴良(九州大学)、Alexandr P. Rasnitsyn(ロシア科学アカデミー・ロンドン自然史博物館)、篠田健二(美祢市歴史民俗資料館)、高橋文雄(美祢市歴史民俗資料館)、Olivier Béthoux(パリ自然史博物館)。
- ・第一著者の大山望氏は、北九州市出身の若手研究者である。

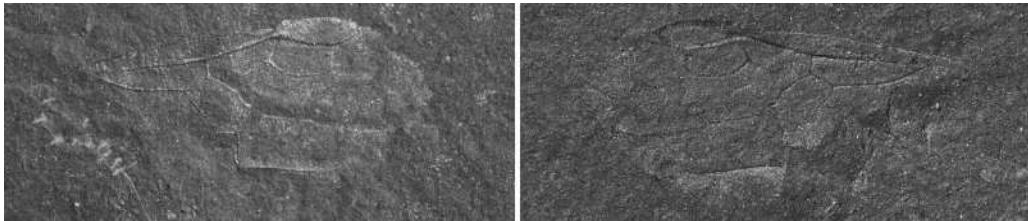


図. 新種の新種ハチ化石標本写真(大山望氏撮影)  
(一つの石を割って化石を出した両側の面)

### 2. *Samarkandykia haradai*(サマルカンディキア・ハラダイ)と命名

- ・学名はグループを示す属名と種を示す種小名の組み合わせからなる(ラテン語)。
- ・*Samarkandykia* は属名で、キルギスの地名サマルカンディック村からとられた名前。
- ・*haradai* は化石の発見者である原田隆好氏を称えて名づけられた種小名である。人名の後に「i」をつけて男性名詞属格としている。学名は「原田氏の *Samarkandykia*」という意味になる。
- ・原田隆好氏は北九州市八幡東区在住で、同区にあった和菓子製造会社「鶴屋」の元社長である。原田氏は長年にわたり化石の採集を続けられ、当館に二千点以上の化石を寄贈されている。過去にも、今回の化石と同じ地層から新種の新種ハチ「ハラダムカシリアゲ」を発見され、その化石は当館にご寄贈いただき、現在常設展で展示されている。それを含め、原田氏の寄贈標本は40点以上展示されている。当館自然史友の会で副会長を務められ、現在は顧問をされている。和菓子関係の資料をご寄贈いただくなど、歴史分野でも当館の活動にご協力いただいている。

- ・美祢産の化石は黒い岩に痕跡的に昆虫の体の一部が残っているものがほとんどで、化石そのものを見つけにくい。今回新種として記載された化石は、原田氏のもつ化石を見つける目や注意深い観察力によって発見された化石の一つである。今回の標本を採集されたのは、1989年2月。

### 3. 化石が見つかった産地・地層と時代

- ・産地は、山口県美祢市大嶺町で、周辺に分布する美祢層群桃ノ木層より産出。この地層は、中生代三畳紀後期カーニアン期(約2億3000万年前)に湖で形成されたと考えられており、当時の植物化石や昆虫化石などが豊富に含まれることが以前より知られている。

### 4. 研究の背景と意義

- ・ハチの毒針は、最初から毒針であったわけではなく、ハチの進化の過程で、産卵管が変化して毒針となったものである。
- ・植物を食べるハチは「ハバチ」と呼ばれ、ハチの中では原始的なグループであるとみなされている(現代でも多くの種が生息している)。一般的に思い浮かべられる「ハチ」のイメージとは少し違う体つきをしたハチである。
- ・本研究では、原始的と見られるハバチの過去の姿を化石から明らかにすることで、ハチの産卵管の多様性や進化史に迫ることを目的としている。
- ・本研究により、サマルカンディキア・ハラダイを含めた美祢層群のハチ類の多様性は世界でも2番目に高いことが明らかとなった。このことから、美祢層群のハバチ化石群がハチ目の進化を理解するうえで重要であることが分かった。

### 5. 論文について

著者: Nozomu Oyama, Haruyoshi Maeda, Alexandr P Rasnitsyn, Kenji Shinoda, Humio Takahashi, Olivier Béthoux.

タイトル: Evolutionary changes in the ovipositor shape of xyelid sawflies (Hymenoptera: Xyelidae) revealed by early fossils.

雑誌: Insect Systematics and Diversity. <https://doi.org/10.1093/isd/ixae038>

\*資料中の図は提供可能です。必要な際はご連絡ください。使用時はクレジットとして「北九州市立自然史・歴史博物館所蔵・大山望撮影」を明記してください。